

《書評》

『食と農のフィールドワーク入門』

荒木一視*・林紀代美**編、昭和堂、2019年

二村太郎†

『食と農のフィールドワーク入門』という書名から、人々はどんな内容を想像するだろうか。ラーメン店や農産物直売所の巡り方を学ぶのか、水田地帯や果樹園や牧場を訪ね歩く秘策を学ぶのか、あるいはそれらと全く異なる内容なのか。井家の日常の観察と従業員へのインタビューをふまえた田中(2015)の論考も「食のフィールドワーク」の1つに入れることができよう。そもそも、食と農のフィールドワークとは、どんなことを行うのだろうか。

本書はそのような疑問や不安に対して答えようとする、地理学者によって書かれた食と農に関する現地調査の一步を踏み出すための入門書である。地理学でフィールドワークへどのように取り組むかについては、刊行物では梶田ほか編(2007)が広く読まれており、そこでは様々な研究者が修士論文を中心としてどのようなテーマについてどのように取り組んできたかが書かれている。しかし、フィールドワークで得た成果を学術雑誌の投稿論文につなげていく流れを意識した書き方になっているため、学部生には少し敷居が高い内容である。それに対して、本書は学部1～2年生向けに書かれたもので、文章はですます調で統一されており、読みやすさを意識したつくりである。ですます調で書かれた点では、類似テーマに関心のある読者には筆頭編者による関連書(荒木, 2013)も併せて読むことを勧めたい。

本書を開いてすぐ左のカバー前扉には『『どこを調査する?』『何を調査する?』『だれに、どうやって調査する?』』といったギモンは、本書を読めば解決します。』とあり、これが本書の核となっている。目次に入る前の「はじめに」では、筆頭編者により本書の意図や注意点が記されている。ここでは、本書を「食と農」というタイトルにしているものの、狩猟採集など多様な食料入手の方法について決して軽視しているわけではないこと、またフィールドワークの対象を「食と農」における産地と食卓だけに対象を絞るのではなく、関連する様々な側面(生産、加工・貯蔵、流通・販売、消費)についても考えていくことを説明している。続いて本書の構成と本書の使い方を概説した後、フィールドワークの多くで実施される手法とツールを「調査の大道具」と称し、聞き取り調査、アンケート調査、フィールドノート(野帳)、ジェネラルサーベイ、地図の五つについて簡単にまとめている。

* 立命館大学食マネジメント学部教授

** 金沢大学人間社会研究域人間科学系准教授

† 同志社大学グローバル地域文化学部准教授

tfutamur@mail.doshisha.ac.jp

本書は三部構成をとる。「第I部 [基礎編] 調査対象ごとに学ぶ——調査方法の基礎を身につけよう」では、食と農にかかわる様々な職種・業種・生業・行動が取り上げられており、ここでは14のFile（本書では「章」でなく「File」と表記されているので、以下はそれに従う）がある。各Fileのタイトルは「〇〇を調査しよう」で統一されており、そこに含まれている対象は農村・農家（吉田国光）、野菜農家（児玉恵理）、大規模畑作農家（吉田国光）、果樹農家（寺床幸雄）、畜産業・畜産農家（淡野寧彦）、漁業・漁村（池口明子）、養殖漁業（塚本礼仁）、青果物卸売市場（観山恵理子）、食品廃棄物（佐々木緑）、食品加工業（伊賀聖屋）、小規模加工・小売店（荒木一視）、スーパーマーケット・外食チェーン（池田真志）、行商やその利用者（伊藤千尋）、消費行動（林紀代美）と多様である。各Fileについての詳述は避けるが、前述の問いに即していえば、第I部の各Fileは「だれに、どうやって」調査するかについて主眼を置いて書かれている。それゆえ、農家の方々からどのように話を聞くか、企業で調査する際にどのような点に気をつけなければいけないかなど、様々な注意点が各File内の文章に散りばめられている。

「第II部 [応用編] テーマごとに学ぶ——個性あふれる素材をどう調査するか」では、より具体的なトピックについて調査する実践例が記されている。ここに含まれる8つのFileは「△△に焦点を当ててみよう」というタイトルで統一され、取り上げられているテーマは高齢者農業（植村円香）、アグリビジネス（後藤拓也）、観光農業（林琢也）、農産物・食品のブランド化（高柳長直）、消費者イメージ（淡野寧彦）、フードデザート（食の砂漠）問題（岩間信之）、食文化・昆虫食（野中健一）、歴史上の魚（橋村修）とより具体的である。第II部の各Fileは「だれに、どうやって」調査するかよりも、誰の「何を」調査するかに重きが置かれている。そのため、ここでは単に調査の内容だけでなく、歴史的な背景から現代社会の諸問題（グローバル経済とのかかわりや人口減少および高齢化社会など）についても言及されているのが特徴的である。なお、第I部と第II部で研究対象とする調査地は、事例集落などの空間スケールから市町村や都道府県、全国レベルまで様々である。

「第III部 [海外編] 海外調査から学ぶ——構えなくとも大丈夫！」では、これまでのFileとは異なり海外での調査について論じている。ここでは各Fileが「□□へフィールドワークに行ってみよう」というタイトルのもと、中国内モンゴル（佐々木達）、フィリピン（中窪啓介）、オーストラリア（大呂興平）、アメリカ合衆国（川久保篤志）、ザンビア（伊藤千尋）、北欧・カナダ（林紀代美）、インド（荒木一視）の7か所における調査が紹介されている。いうまでもなく、第III部で意識されているのは「どこで」調査するかであるが、ここには「だれに、どうやって」と「何を」調査するかに関する知見も多く含まれている。学部生が海外調査に行くのはハードルが高いかもしれないが、各執筆者がそれぞれの調査地で言葉やデータの課題を乗り越えつつどのような発見や新たな学びを得てきたかが、生き生きと書かれている。

第I部から第III部までの全29Fileには、冒頭に調査の目的を記したイントロダクション、対象とする調査に必要な小道具（ツール）、そして執筆者がその調査で得た知見をもとに書かれた学術論文や著書など研究成果の書誌情報が記されている。各Fileはどれも8ページ前後でまとめられており、長くても10ページ程度、短いものは5ページと、一話完結としてもすぐ読み終わられる。また、各Fileには地図や写真を含め図表が多く含まれており、初学者にとっても読みやすい内容となっている。

本書の最大の意義は、その目的や対象が何であれ、「食と農」に関して何らかの調査をする者にとって、手引書として極めて利用しやすい一冊となっていることである。評者は所属先でゼミや

フィールドワーク科目を担当していないため、学生に現地調査や調査法を指導する機会を得ていないが、食と農に関連する何らかのテーマで学生が卒業論文研究を行うことを目指すならば、まず本書の通読を勧めるだろう。本書の File 1 は「『とりあえず、現地に行って、地元の方に話を聞いてきたら?』 フィールドワークによってデータを収集する研究分野で、よく耳にするフレーズです」（4頁）という文章から始まるが、「まず現地へ行け」という指導はある意味で無責任かつ暴力的なものであり、丸腰で現地を訪ねても明らかにできることは限られている。どのような分野でどのような手法を用いて調査をするかがある程度定まっている者には前述の梶田ほか編（2007）が適しているが、食と農に関して「どこで」「誰に」「何を」「どのように」調査するかが定まっていない者には、「まず現地へ行け」と勧められるよりも本書から視座を得ることの方が大きい。市民農園や観光牧場やグレインエレベーターや農産物直売所や魚市場など、本書の File にない研究対象も挙げていけば多々あるだろうが、それは本書で得た学びをもとに調査者が探究を進めていけばよいだろう。

本書が有用なのは、ですます調で記述された文章が読みやすいからだけではない。多くの執筆者が自身のフィールドワークを実施していく上で作成した文書や資料およびツールを抜粋して紹介しており、そこから調査の臨場感に接することができる。ここには、現地調査の協力依頼文の例から、調査票と質問項目の一覧や抜粋、名刺のサンプル、分布図、GPS の記録依頼文書、フィールドノートの一部まで様々な情報が含まれており、これから調査を始める者にとって「どこで」「誰に」「何を」「どのように」聞くかを検討する上でも大いに参考になる。

さらに、本書は主に 30 代～40 代の地理学者によって書かれているが、何年も同じテーマに取り組んできた執筆者によるフィールドワーク論はその醍醐味がいかに発揮されており、内容も大変面白い。中でも、評者は個人的に File21（食文化・昆虫食）、File24（フィリピン）、そして File25（オーストラリア）から学ぶことが多くあった。

他方で、本書は手放しで称賛できない課題もいくつか見られる。本書は分担執筆者が多くいるだけでなく、各々が学んできた経緯が異なるゆえに調査の取り組み方にも違いがみられ、それが各 File の内容と書き方の不統一に反映されている。具体的にいえば、フィールドワークを実施する前に研究の問い（リサーチクエスション）を明確にし、それをもとに調査内容と知見を紹介している File もあれば、前提として調査対象ありきゆえに「どこで」「どのような」フィールドワークをしたかの記述に終始し、「なぜ」その調査をしたのか（あるいはなぜその調査が必要だったのか）が書かれていない File も散見された。

また、研究の問いがないだけでなく、調査によってどのような知見を得たのかを記していない File が多いのも残念であった。各執筆者には個々が執筆した論文や著書を読んで学んでほしいという思いもあっただろうが、本書が対象読者とする学部 1・2 年生の学生がいきなり学術論文を読むかはわからないし、本書を読む学生が地理学科の学生だけとはかぎらない。そもそも、本書で記された論文をどのように入手するかを知らない読者が大半かもしれない。少なくとも、電子的に公開されている学術論文は「インターネットでダウンロード可能」などの付記があると親切である気がした。

また、本書で調査の技法に関して学ぶことは多くあるが、学術研究に触れる機会を提供することを目的とするなら、調査によって得られた学びについてもっと記されていても良いと思う。その意味では、研究の出発点と問いから調査の過程やそこで明らかになったことまでをまとめた File16（アグリビジネス）が、評者には一番学生に紹介したい内容であると感じた。また、本書の末尾にある執筆者紹介で各々の「調査のお供」とする必需持参品が記されているが、同時に彼らが薦めるフィー

ルドワークに関する図書を1冊ずつ挙げていると、個々の研究成果だけでなく「食と農のフィールドワーク論」をさらに発展させるうえでも効果的だっただろう。

ここまで評者のないものねだりばかり書いたが、「皆『フィールドワークこそ地理学の原点』と自認(?)している地理学者」(ii頁)によって書かれた本書は、食と農のフィールドワークが新たな学びや発見を拓く貴重な機会であることを、初学者に向けて存分に伝えている。個々がフィールドで何を見て、聞いて、嗅いで、味わって、触って、感じるのか、そしてそれらを調べるまでで留めるのか、どう書くのか、さらにどう問うのか、進む先は読者によって様々であろう。人間は生きていくうえで地球上の食べ物に依存しており、それゆえ食や農について知ろうとする行為は根源的な学びの一つである。それゆえ、本書を読んで「食と農のフィールドワーク」から学び得る知見の面白さを知ってもらえるよう、大学1～2年生だけでなく多くの人に薦めたい。

参考文献

- 荒木一視編 (2013) 『食料の地理学の小さな教科書』 ナカニシヤ出版.
梶田真・仁平尊明・加藤政洋編 (2007) 『地域調査ことはじめ：あるく・みる・かく』 ナカニシヤ出版.
田中研之輔 (2015) 『井家の経営：24時間営業の組織エスノグラフィー』 法律文化社.